明治實業讀本　卷二

教科書文庫
4
810
44-1909
2000054288

43335
教科書文庫
4
810
44-1909
20000
54288

375.9
Iz21

教科書文庫
4
810
44-1909
2000054288

文部省
實業學務局
泉屋清次郎
中村康之助
共著

明治實業讀本

東京
同文館藏版

広島大学図書
2000054288

資料室
中央図書館

広島大学
教
54288
図書

明治實業讀本 卷の二

目次

一 故郷……一
二 伊能忠敬……五
三 自然の音樂……九
四 住居……一一
五 紀國屋文左衛門……一四
六 小笠原島通信……二〇
七 衣服……二四
八 濱田彌兵衛……二九

九　三つの友……三三
一〇　分度の法……三五
一一　ジエー、グールド（其の一）……三九
一二　ジエー、グールド（其の二）……四四
一三　內職……四九
一四　大阪商業の沿革……五四
一五　北海道の農業……六〇
一六　森……六四
一七　「クルップ」鐵工場……六五
一八　日本海の大海戰……七三
一九　日本海々戰の歌……七八

二〇　人間社會自ら義務あり……八二
二一　「ボアソナード」を送る詞……八五
二二　海濱の氣候……八八
二三　旅行の心得……九一
二四　元旦の松島（その一）……九四
二五　元旦の松島（その二）……九八
二六　北京籠城……一〇二
二七　瀨戸內海……一〇七
二八　皇室の御聖德……一一〇

明治實業讀本　卷の二目次終

故郷

暴威

明治實業讀本　卷の二

一　故郷

故郷を思ふ情は、われひと、共に、變らぬことにて、東西の別あるべくもあらず。されば、何處の國人も、皆、わが故郷の美を說かざるはなく、一たび、郷關を出づれば、堪へがたき望郷の念にうたるといへり。

嘗て青が島といふ南洋の一孤島に、火山爆發のことありて、火光焰々として天を焦し、はては石を飛ばし灰をふらし、その暴威の盛なる、島中の人畜悉く斃れ盡して、僅に十餘人

窮北不毛

遷從

の八丈島に逃るゝを得たるのみ。しかも、この十餘人は、遂にその故郷を忘るゝこと能はず、火のやむと聞くや、喜び勇みて、またその恐るべき噴火の島に歸れりといふ。

占守の地は、千島の内にありて、窮北不毛の地なり。たゞ氷雪の累々として相依れるを見るのみなれば、開拓使廳の當時、土人に令して、南の方、色丹島に移らしめたり。色丹の地は、樹林濃やかに、河川その間に流れ、鳥獸その陰に集り、田園の收穫また頗る多きところなり。さるを遷從の土人等、皆この新樂土を喜ばずして、歸心矢の如く、遂に、遠く、窮北不毛の故島に逃れ歸れりといふ。

往年、米國シカゴ博覽會の擧ありし時、その中に、エスキモー土人の部落を置き、數多の土人を伴ひ來りて、そこに住ませたることありしが、彼等はこの文明繁華の地にありて、衣食に、住居に、無限の快樂を享けながら、なほも故郷の空忘れがたく、幾度かその氷山雪塊の殊境に逃れ去らんことを企てたりといふ。

氷山雪塊

まことに、もろきは人の情なり。他郷の樂土も、故郷の住みよきに比ぶれば、物の數にもあらず。その口を極めて、故郷の美を說き、鄕關の樂を說くも、まことに已むを得ぬことなるべし。

されど、これらは、たゞ故郷を戀しといひ鄕關を忘れ難しといふに過きず。人の自然の情、深く賞するに足らざるべ

愛情

青史

金甌無缺

し。我等は更にわが故郷に向つて、まことの愛情をさゝぐべき務あることを思はざるべからず。いかにせばわが故郷の名を大にすべきか、いかにせばわが故郷の名を世界にも輝し、後の世にも傳ふることを得べきか。これ、その郷人の朝夕に忘るべからざる務なり。「コルシカ」の一孤島は、その島民ナポレオンによりて、不朽の名を青史に輝したり。三河の國名は、その三河武士によりて、ゆかしき名を國史に垂れたり。これらは、まことに、その郷に忠なる好例にあらずや。

抑も郷を愛する念は、やがて國を愛する心なり。國を愛する心は、やがてわが金甌無缺の國體を千古に傳ふべき道なり。一郷に人たり、一國に民たるもの、その郷國を慕ふ情を進めて、更にその郷國を愛する情を盛にせざるべからざるなり。

粗惡

驚嘆

二　伊能忠敬

學術未だ開けず、機械甚だ粗惡なりし時代にありて、わが日本全國の海岸を測量し、地圖を大成して、國人を益せるのみならず、外國人をも驚嘆せしめたる伊能忠敬の如きは、まことに千古稀なる偉人といはざるべからず。

忠敬は、上總國武射郡小堤村、神保某の子にして、十八歳の時、伊能長由の養子となれり。伊能氏は下總國香取郡、佐原

醸造

村の豪家にして、世々酒・醤油の醸造を業とせり。長由はやく死して、家道やゝ衰へしが、忠敬儉素を務め、奢侈を禁じ、刻苦勉勵して、遂によく家産を恢復せり。

沿海

忠敬、はやくより、曆學を好みけるが、年五十に及びたる時、その子に家を讓りて江戸に出で、專ら曆學の研究に心をひそめぬ。然るに當時曆法精しからず。たまたま高橋東岡の、西洋の曆法を傳ふるを聞き、これにつきて學ぶ所ありしが、爾來六年の間、晝夜をわかたず勉勵したりければ、その學、大に進みたり。

寛政十二年、年五十六の時、幕府の命を受けて、蝦夷地を測量す、その後、また、東海道及び奥羽北陸の沿海を測量し、圖を

廩米

作りて幕府に上れり。幕府その功を賞し、廩米を給して、小普請組となし、天文方に屬せしむ。後また山陰・山陽・西海・南海の沿海測量を命ぜられしが、その時もまた圖を作りて幕府に上れり。

臆病

測量をはじめてより、こゝに至るまで、實に十有八年、全國の海岸到らざる處なかりしが、その間、つぶさに艱難を嘗め、身命を危くしたること幾回なるかを知らず。嘗て薩摩の諸島を測量せむとしける時、風あらく浪、甚、高かりしかば、船子等、船を出すことを欲せず。忠敬大に怒りて、「薩摩人は大膽なりと聞きしに、こは何たる臆病ぞ、風浪何ぞ懼るゝに足らむ、速に船出せ」といふに、船子等やむなく漕ぎ出しゝが、風

浪いよいよあらく、船覆らむとせしこと五六回、辛くして島地に達することを得たりといふ。

晩年

忠敬、晩年、宇内沿海輿地全圖及び度數譜・行程記を集成して、幕府に上りしが、文政元年四月十三日、七十四歳にして歿せり。

散佚

その著せる圖書數十部中には、散佚せしものも少からざれど、その今日に遺れる地圖は、實に末代までの重寶なり。

明治十六年、朝廷その功を追賞して、正四位を贈られしが、有志の士また相謀りて、紀功碑を東京芝公園内に建てたり。あゝ忠敬の名は萬世に亘りて朽ちざるべきなり。（那珂通世）

三　自然の音樂

琴笛

雲雀

鷄

胡弓

聲の調子に一定の高低ありて、節面白く鳴り響くを音樂といふ。琴・笛・三味線・ピヤノ・オルガン・唱歌などの音曲は、通例いふ所の音樂なり。されど、かゝる人爲的の音樂の外に、自然の音樂ともいふべきものあり。鶯・雲雀・松蟲の聲など、これなり。その他、心を留めて萬物の聲を聞けば、松風にも水の聲にも、自然に美しきしらべはあるなり。鷄も歌ひ、烏も啼く、雀・雲雀・山がらなど、百鳥の聲、皆、音樂なり。鳶の高き天に歌ひ、鳩の低き梢に鳴く、これもまた音樂なり。或鳥の音は笛の如く、或鳥の音は琴の如く、また或鳥の音は胡弓の如し。

機織蟲

篳篥

ひぐらしの聲に夕日沈めば、松蟲・鈴蟲・機織蟲・こほろぎなど鳴き出づ。或は金の板を叩くが如く、或は銀の鈴を振るが如し。蛙・蟬・蜂など、皆それぞれに樂を奏す。草を吹く風、樹を吹く風、空高く吹く風など、風も各その音色を異にす。或は琴の如く、或は笙の如く、或は篳篥の如し。

水の音樂は、更に面白し。泉の水の湧き出づる音は、琴・尺八・「ヒヤノ」の曲とも聞くべく、落葉をくゞる細き流の聲は、琵琶・月琴の調にも似たり。軒の雨垂を豆大鼓の音に喩へむか、瀑布の轟轟と落つるは、大太鼓の響にも喩ふべからむ。たゞ彼の大海の波の音の、物すごくいさましきに至りては、また喩ふべきものなし。（坪内雄藏）

流通

四　住居

家を造りて住むは、一つには寒暑・雨露を凌がん爲めなれど、二つには、家族相集りて安らかに生を營み、和樂を共にせんが爲なり。

居宅を構ふるに、最、望ましき土地は、左の諸點に合ひたる地なり。第一は、空氣の流通よく、日當りよく、用水清潔にして、其量充分なること。第二は、土質よく地位宜しきこと。第三は、一家の經濟にも家族の娯樂にも便宜よきこと。第四には、小供等の教育のためにも諸般の用事の爲にも便宜よきこと。これなり。要するに、衛生と經濟との二點に合

開豁

障碍

ひたるが、最、良し。

常に新鮮なる空氣の流通を欲せば、高燥開豁にして樹木ある處を選ぶべし。蓋、草木の葉は、炭酸を吸うて酸素を吐き、空氣を清淨ならしむるのみならず、人目をも娛ましむる効あり。日光をよく受けんと思はゞ、南向にして近隣に障碍なき處を第一とすべし。東南・西北に向ひたる處これに次ぐ。日光は身體の成育活動に必要なるのみならず、精神の保養にも缺くべからざるものなり。

土質は、砂石・灰石等を以て成りたる土地を可とす。凹地又は沼澤に接近したる處は、健康に適せず。かゝる處は、概して水の質も宜しからず、水惡ければ直接に害あるはいふ

腸窒扶斯

虎列刺

取捨

熱閙

までもなく、汚水滯りて腐敗するときは、有毒の瓦斯を發生して、傳染病の媒介を爲すことあり。かの回歸熱・赤痢・腸窒扶斯・虎列刺等は、皆、水土の惡しきより來るものなり。

さて、經濟及び便利の點よりいはんに、總じて便利なる處は、自然、地價も貴く、日用品の價・雇人の給料等も廉ならずして、平常の入費も嵩み勝ちなれど、職業によりては、交通その他の便利あるため、その失費を償ひ得て餘りあることあり。これ等は、家計の度と職業の種類とによりて、取捨すべきなり。

家族の娛樂に適する處は、概して交通の便利なる地にあり。子弟の教育に適する處は、熱閙の地よりも却りて靜閑

なる地に多し。これらの點は實地に臨みて選擇を行ふべきなり。（坪内雄藏）

奇計心算

騰貴

五　紀國屋文左衛門

紀國屋文左衛門は、紀州の人なり。幼より性快活、やゝ長ずるに及びて、奇計を好み、心算に妙なり。紀州は蜜柑の名産地にして、毎歳これを三都に積み出し、その國益極めて大なりしが、嘗、冬季に當り、東海の風浪大に起りて、四方の商船、みな海上に出づること能はざることありき。こゝを以て、江戸の市場には、柑子の價、俄に騰貴し、都人は頸を延べて、日に柑船の入港を望めり。

冒險

豪膽

逆浪

時に、文左、年甫めて十八。これを聞くや、勃然として冒險の業を企て、海に航して柑子を輸さむと欲す。たまたま邑人の廢船を有するものあり。文左これを借りて修繕を加へ、數日にして成る。乃、揚言していはく「よく風浪を冒して海に航するものあらば、人ごとに百金を與へむ」と。人皆その虚妄を笑ふ。一人あり、これに應ず。即、百金を與ふ。こゝにおいて、近邑の壯丁、來りて募に應ずるもの十餘人。皆これ豪膽の少年なり。

文左、大に悅びて、悉くこれにその約せる百金を與へ、且つ酒饌を具へ、約して兄弟となる。時に、海上、風ますます荒く、逆浪天を蹴る。一行十有九人、皆、凶服をつけて、あらかじめ

黎明
默禱
慨然

死を期せり。翌日黎明、文左、柑子數千箱を大船に載せ、たゞちに刀を拔いてその髮を切り、これを龍王に献じ、默禱した る後、船頭に立ち、一刀にして纜を斷ちて出帆せり。烈風帆を吹いて、船の駛すること矢の如く、一晝夜にして江戸に達す。この時、商船の港に入るもの、ひとりこの一隻船のみ。都商皆歡迎して神助の致す所となす。文左、乃、價を定めて柑子を賣り、一朝にして五萬金を獲たり。その歸らむとするや、更に鹽漬の鮭魚十萬尾を買ひ、船載してこれを京攝の諸國に賣る。こゝにおいて一躍して富豪となりぬ。

一日慨然として自ら奮つていはく、「男子五尺の身、爲すなくんば、即、やむ。苟も爲すあらば一鄕の善人たるに安んず

よく聚めよく散ず
飽食
指目

べからず。そもそも、一家の富は天下の富なり、一人の貧は天下の貧なり、われまさに天下の財を網羅して、以て天下の人に散ぜむとす。散ずるを知りて聚むるを知らざると、聚むるを知りて散ずるを知らざると、皆、不可なり。よく聚め、よく散じて、はじめて、共に財利の事を語るべきなり、」と。急に家奴を率ゐて江戸に赴き、居を八町堀に卜して、材木を鬻ぐを業とす。

一寓客あり。飽食して終日睡臥す、その爲す所は日に一たび屋上に上り、以て四方を望見するのみ。同輩、指目してその無用を笑はざるなし。文左、これを遇すること頗る厚し。かくすること月餘、一日倉皇として文左を要して俱に

屋に上り、西位を指示していはく、「子、また、かの雲氣の紅衣に似たる者を見ざるか、天下の大利は實にこの一事にあり、子何ぞあらかじめこれが計をなさゞる、」と。文左、拜謝し、擧げて上客となす。三數日出でざるに、果して本郷丸山に大火災ありき。

盤水

はじめ、火の發するや、文左急に婢僕をして家具を運び、倉庫を鎖し、盤水を蓄へしめ、聲を放ちて大呼す。そのさま、恰も、近隣火を失するものゝ如し。家人みな以て狂せりとなす。文左笑つていはく、「あゝ何ぞ小火の大火となるなきを知らむや、」と。

炎焔

言未だ終らざるに、北風大に起りて塵砂を卷き、炎焔天を燒く。北部未だ燼するに及ばずして、火道既に

燎原

城中に入り、分れて三處となり、合して一道となる。比屋延燒して燎原の勢をなし、千門萬戸悉く烏有となりぬ。文左、

從容

從容として餘裕あるを示し、火の未だ滅せざるに先ち、急に裝を治めて、即日都を發し、晝夜兼行、數日にして木曾山に到り、一農家に投宿す。

時に稚子の戸外に嬉遊するを見る。乃ち、火箸を把り、五板金を穿ちて孔を作り、紙線にてこれを貫き、火箸に結び、揮ひて聲を成し、招きてこれを稚子に與ふ。彼等、家に歸りてこれを告ぐ。父母相語りていはく、「今の時に當りて五板金を拋つこと土芥の如きは、これ必ず金穴の主翁ならむ、」と。よりて、窃にその姓名を問ひ、はじめてその文左なるを知り、

烙印

市利

所在傳聞して山木を鬻がむとす。文左、あらかじめ價を定め、斧斤を以て林に入り、木材を編みて筏となし、烙印して表記すること凡そ數百萬本、これを木曾川に下し、幾くならずして江戸に達す。この時、竹頭木屑も多く得易からず、文左獨り良材を有すること、邱山の如し。これを都下商賈の販賣するものに比すれば、材良にして價廉なり。こゝにおいて、公卿牧伯より農工商賈に至るまで、爭ひて材を文左のもとに求めしより、市利巨萬に達し、文左の富、都下に冠たり。數年にして、終に百萬金を累ぬるに至りぬ。（久松義典）

六　小笠原島通信

内地人

瘠地

拜啓仕候。陳れば此度出發につき、萬事御配慮を蒙り候段、深く謝し奉り候。五月十五日午後二時半、横濱出帆、途中兩日程風雨强く、少少困難仕候へども、常に追手風にて、船の走ること一時間平均八哩位の割にて、同月二十二日、當小笠原島に到着仕候。當地着後、無風若くは南風にて出帆するを得ず、いづれ近日出發の運に相成べくと存候。當島は餘程有利の地なる樣、これまでは聞き及び居り候處、實際は大に相違し、瘠地にして且山坂多く、平地甚だ稀なれば、決して望ありとも覺えず、唯唯氣候内地と異にして、パインアップル、バナナなども出來、又、珈琲、マニラタコの木、その外内地に見慣れざる草木も出來、海に正覺坊を生ずる故、内地人の目

開墾

推測

に新しくして、かくは申し觸らしたることと思はれ候。畢竟陸地の開墾も、水陸の漁獵も、皆、小規模にして、所謂出稼商人、又は漁夫などの行ふべきものに過ぎず候。母島は少少は宜しき由に候へども、決して大に勝らざることは、その形の小なるにても推測することを得べく候。唯父島の港は非常によろしきものにて、若し南洋の通商繁昌するに至らば、この島は、薪水の爲めに、是非とも碇泊せざるを得ざる所たるべくと存候。

當今、當地の暖氣は、日中八十二三度にて、單衣一枚にて宜しく、夜に入りては、凉風吹きて、眞に爽快を覺え候。沿岸に油樹といふ樹あり。葉茂りて蓊蓊たり。この地にて暑を

歸化人

蓄藏

凌ぐを得るは全くこの樹のある爲めに候。歸化人の家にも參り、色々話など致候。歸化人は、米國人、若くは南洋諸島人、若くはその混合種に候。皆徒跣にて土上を歩み、多くはカノウ船にて正覺坊を取り、掌大の地に玉蜀黍を植ゑ、以てその生計を立て、憐むべき生涯をなし、文明人の末にも斯る者ありやと怪まるる程なるが、蓄積心は內地人に比すれば遙に盛んにして、その金庫の內には許多の貨幣を蓄藏せる者もありと申すことに候。

わが天祐丸が將にこの島に達せんとする時、定期船駿河丸はこの島を出發し、島司はこの船にて東京を出でたれば、面會すること能はず。小谷三郎君、その留守にて、小生非常

厚遇

の厚遇を受け候。小生身體强健にして、內地に居りし時よりは、氣分常に愉快に候。御安心下され度候。匆匆頓首。

（田口卯吉）

容儀

七　衣服

衣服の用は、第一に寒暖を凌ぎ、第二に濕氣を防ぎ、第三には皮膚を護らんがためなれども、又容儀を整ふるの用をも兼ねたり。されば、その地質・色合・及び仕立方等は、以上の目的に適せしむるを要す。その原料には、毛織・木綿・絹・麻等あり。

毛織は質粗にして輕く、よく體溫を保ち外熱を遮るが故に、衛生には適すれども、價貴ければ容易に求め難し。而して、蟲害に罹り易く、また洗濯にも手數を要するはその欠點なり。

洗濯

光澤

綿布は毛織に次ぎて體溫を保ち、價廉にして洗濯も容易なれば、常服となすに適す。

絹布は質細にして光澤あり、且、柔にして輕ければ、この點のみより見れば、衣服に適すれども、質細密に過ぎて空氣を含むこと少く、從ひて體溫を保つの力弱く、且、價も貴ければ、衛生上・經濟上、ともに常服に適せず。然れども、美麗にして輕ければ、晴衣として賞用せらる。

又麻布は體溫を保つこと絹布にも劣り、若し發汗により

蒸發

肌著

て濕潤するときは、氣孔爲に閉塞するのみならず、これを蒸發せしむること、亦、頗る急なれば、體溫を奪却すること多く、衞生上、最、下等に位す。　然れども、輕くして凉しければ、暑中の衣服に用ひらる。

すべて、衣服の地質は、季節・土地・年齡・健康・不健康等を斟酌して選ばざるべからず。　例へば、寒冷なる時・濕氣ある時・又は溫度の急變する時の如きは、毛織・木綿を用ひ、殊に其肌著には「フランネル」の類を選び、又、老人及び病人の衣服としては、體溫保護に適する毛織・木綿を選ぶが如きこれなり。

色合は、黑は熱を吸ひやすく、白はこれに反するを以て、夏は多く白地・薄色地を選び、冬は黑又は濃き色を用ふるなり。

粗野

分泌

もしそれ容儀のためにする衣服の如きは、職業・身分・年齡等によりて相應のものを用ひ、華美に流れず粗野に陷らざらんことを要す。

仕立方は、風俗・習慣等に由ることなれば、一概に良否を斷じ難けれども、事務に從ひ職業を營むには、洋服或は筒袖をよしとす。　これ、袖短くして立ち働きに便なればなり。

衣服の洗濯は、衞生の上にも、又、保存の上にも、甚、必要なることなり。　これを衞生上より見れば、人の皮膚は、絕えず體內の汚物を分泌するがゆゑ、若、汚れたる衣服を著れば、汚垢の氣孔を塞ぎ、汚物の發散を妨げ、體內に邪氣をかもして、動もすれば病源となることあり。　故に下著・肌著の如きは、殊

氣孔
潛熱

によく洗濯して清潔ならしめざるべからず。

又濕ひたる衣服を著るときは、皮膚の氣孔を塞ぎて汚物の發散を妨ぐるのみならず、蒸氣の潛熱のために體溫を奪ひ去らるゝを以て、衞生上には殊に宜しからず。若、途中、夕立などに逢ひて、衣服を濕すが如きことあらば、直に取り替ふべし。著たるまゝ自然に乾かすが如きは、不心得の甚しきものと知るべし。すべて肌著などは、多少の濕氣を帶べるものなれば、洗濯せざる時も、時々日光にあてゝ乾かすを要す。

洗濯をたび〳〵すれば、織物の地質を損するとのみ思ふは誤なり。汚れたる衣服をその儘になし置けば、自然に地質を損するものなり。又、洗濯して縫ひ替ふるときは、折り目・絲目の位置を變ずるを以て、摺れ損ずること少し。但、衣服を洗ふには、其品柄・染色等に注意して、地質を損せしめず、染色を褪めしめざるなどは、大いに工夫を要することゝ知るべし。（關以雄）

寄航

八　濱田彌兵衞

寛永の頃、長崎に末次平藏といふ者ありけり。毎年、人を遣して、漳州よりおほくの絲を買ひ入れさせけるが、いつも先づ「タカサゴ」島に寄航し、さて後、漳州に渡るを例とせり。「タカサゴ」島とは、今の臺灣島なり。

掠奪

ある年、常の如く多分の金銀を船に積み入れさせ、彼處に渡らしめしに、その頃「タカサゴ」島に寄寓し居たる紅毛人のために、漳州のもよりにて掠奪せられたり。船人等は、證人として土人一兩輩を虜として逃げ來り、委しくその情を告げしかば、平藏、無念やる方なく、いかにもしてこの恨を報いむとて、日頃親しき濱田彌兵衛に計りければ、彌兵衛そは拙者、必、はらし參らすべし、明春にも大船一艘と、百姓百人ばかりとを賜り候へといふ。平藏うち悅びて、その設をなしぬ。

寛永五年三月初旬、彌兵衛は弟小左衛門、その子新藏と共に船を出して、「タカサゴ」島に著きぬ。紅毛人等は船十餘艘を出して取圍み、彌兵衛等の來意を問ひたゞせり。彌兵衛

荒蕪

安堵

主宰

答へていふ。この國沃土比類なけれど、人民耕作の方を知らず、田畑少くして荒蕪の土地多し、故に先年日本の農民この土を開拓せむと約し置きしを以て、渡り來れるなりとたばかる。紅毛人ども、船中を一一改め見るに、農具の外一物もなかりければ、やや安堵して上陸を許しけれども、一間の内にとぢ籠めて、いださざりけり。彌兵衛は歎願の旨ありと請ひ、兄弟父子三人、城に入り、主宰なる「カピタン」に對面したり。「カピタン」又更に、その來意を問ふ。彌兵衛は至極怯れたる體にもてなし、聲など振はして返答す。「カピタン」、聲低し、いますこし近く寄り候へ、といひければ、田地の事などいふ體にし、恐る恐る這ひより、隙を窺ひて飛びかかり、「カピ

タン」を取て押へ、隱しもてる刄を拔きて、胸下にさし當て「往年日本の商船を掠奪せしこと、實に言語に堪へたり。今その罪を糺さむ」とぞ罵る。居合せたる紅毛人は更なり、「カピタン」も大に怖れ「金銀は十倍にして償ふべし。只命のみは免し給へ」と、詫び入りぬ。

謝罪

彌兵衛その言の如くせしめ、なほ「カピタン」の一子を質とし、他の紅毛人二三を召連れて歸國せり。翌年「カピタン」は謝罪のために長崎に來り、子を返さむことを請ひたれど、子は既に牢死したる後なりければ、その遺物のみ還し與へたりとぞ。彌兵衛の如きは義俠比類なきものといふべし。

九　三つの友

法庭

猶豫

嘗てある人の、三人の友をもちたるがありき。その中の二人とは、最も親しき交ありて、世にかへがたきものなりと思ひ居しかど、その一人をば、平生これを疎んじて、われよりはおとづるゝことも稀なりけり。その人、ある時、人に訴へられて、身に覺えもなき罪名を負ひ、遂に法庭に引き出されぬ。その時、彼はわが友に向ひて、「誰にてもあれ、法庭に出でて、わが爲にわが無實の罪なることを證言しくれずや」とたのみぬ。

第一の友なりと思ひ居たりしその人は、「われは、今、猶豫し難き急用ありて君の請に應ずること能はず」とて、すげなく

無實

瞬間

も、その請を斥けぬ。第二の友は、彼を法庭の門まで送りて、「こゝより中には入らむことおそろし」とてゆき別れぬ。さて、平生彼の心にそまざりし彼の第三の友は、この時つと寄り來て、みづから奮つて法庭に入り、彼が爲にその無實の罪なることを證言して、遂にこれを免れしめたりといふ。

人はこの世において、すべて三人の友をもてり。さても、この三人の友は、われらの死の瞬間において、いかなる友情をわれらにつくしくるべきぞ。われらの最も親しかりし「金」は、先づ第一にわれらを棄てゝ去らむ。われらの第二の友たりし彼の親戚朋友は、われらを墓所まで送りくれむ。されど、彼等はそこにわれらを棄てゝ去らむ。第三の友は、

鳴呼

不如意

悲境

われらが平生心にそまざりし「われらの事業」といふものなり。彼は、この時、ひとりその身を挺して、われらを永久の世に導くべし。かくて、われらの名を青史に垂れて、千古に傳へむことをつとめくるゝなるべし。鳴呼、われらは平生この第三の友を疎んじて可ならむや。

一〇　分度の法

尊德翁壯年の頃、小田原侯の大夫に服部十郎兵衛といふものありき。千三百石の大祿を受けながら、家計不如意にして、借財一千兩に及び、これをいかにともすること能はで、今は職を辭せむとするまでの悲境に陷れり。時に人あり

慈悲　整理　奮然　過去

て、「柏木村に金次郎といふものあり、はやくより父母に別れ、田地も皆人手に渡りたりしを、僅に作り出したる一苞の米より、刻苦して廢れし家を興せり。心は潤く行は正しく、慈悲深くして、まことに非凡の人なり。この人をたのみて一家の整理をまかせられずや」と、いひければ、服部は大に喜びて、急に人をやり、仔細を語りてたのみ入りぬ。

翁、はじめは聞き入れざりしが、服部が再三再四使を立てて、まことをつくし身を卑くして、ひたすらに賴み入るに感じて、遂に奮然として起ち、家をば妻にまかせて、服部の邸に到りぬ。さて、まづその不始末を責めて、その自省の念を起さしめ、「過去の過を知りたらば、その過を補はむとつとむべし。さらば身を責むべし。身を責めむとならば、食を飯汁とかぎり、衣を綿衣とかぎり、慾を無用のものに滿すべからず。よくよくこの三個條を守るべし」と、いひきかせられたり。次にその家の從者どもを集めて、「五年間わが指揮に隨ふべし」と命じ、また債主を呼びて仔細を語り聞かせ、かくてこゝに、翁が一代の主張たりし分度の法を布かれぬ。そは入るものをはかりて分度を引き去り、中分の活計をなすとの謂なり。それより刻苦勉勵、身を奴僕の列に入れて、ひたすらにその實行につとめられしかば、五年の間に、千兩の借財はそのあとをもとゞめずなりて、別に三百兩を剩すに至りぬ。

指揮　奴僕

餘財

感歎

謝恩

こゝに翁はその三百兩を服部夫妻に示し、「今は借金もなくなりてかく三百兩の餘財を生じたり。この内、百兩は主人の手元に置きて非常の用に備へ給へ、百兩は夫人の手元に置きて、家の再び衰へざる豫備とせらるべし、餘の百兩はいかにとも思ふがまゝにし給ふべし」といはれぬ。服部大に感歎して、「われらが再び日の光を仰ぐに至れるは、一に皆、君の力なり。この三百兩は、そのまゝに君が謝恩の印として參らずとも、なほ以てこの高恩に酬ゆるに足らぬに、かく後來の爲にとてわれらに與へらるゝなれば、辭まむやうもなし、せめて餘の百兩を受けて給はれ」といふ。翁悅びてこれを受け、なほ後の事ども懇にいひきかせて席を退き、さて

忠義

飄然

從者どもを呼び集めて、「汝等五年の長き間、よくわが指揮に從ひて辛苦を忍びたり。この家の今日あるは汝等の功なり。されば、汝等の忠義を賞せむため、この金を分ち與へむ。これわが與ふるにあらず、主人の與へらるゝものなれば、謹みて受けよ。」とて、さきに受けたる百兩の金を與へられぬ。

かくて翁は飄然として服部の家を去られきとぞ。その廉潔の心げに欽すべきにあらずや。（幸田露伴）

一一　ジェー、グールド（その一）

亞米利加は、黄金の國といはれるだけに、資本家中々多いが、とりわけ「グールド」の如き大資本家は、一寸珍しいものと

思ふ　身には三萬英里の鐵道を私有して、鐵道大王の名を全世界に轟したばかりでなく、電線事業にも偉大な勢力を有し、眞に經濟社會の覇王といふべきである。　尤も、世には赤手から起つて萬金の富貴を致した人物も少くはないから、男子が一度奮ひ立つたなら、敢て「グールド」を偉とするに足らない大事業家にもなれよう。　然し、「グールド」の樣に、その經歷の内に、權門にも媚びず勢家にも諂はないで、能くその業を全うしたといふ文句を挿ませやうとしたなら、恐く多分の人はこの選に洩れることであらう。

覇王

權門

「ジエー、グールド」は、北米合衆國「デラウエア」州の「ロッキスヒユリー」といふ處で、千八百四十二年に生れた。　父は至つて貧しい農夫であつたから、彼は幼年の頃から、姉妹と共に朝暮は牛乳を搾つて四方に配達したり、晝間は熱い時でも寒い時でも、毎日徒跣で牧場を奔走して居つた。　けれども、彼は生來農耕の事を好まなかつたから、或時十五英里ばかり距てゝ居る學校へ通學したいと思つて、父の許を乞うたが、父は許さない。　仍つて彼は痛く躊躇して居つたが、會、その學校の隣地の大工の處で、家僮を雇はむとして居るのを聞いて、遂にこの家へ雇はれて行き、それからといふものは、怖しいもので、今迄は碌々學校へも行かなかつた「グールド」であるが、夜々勉强して一個年あまりたつたら、大抵な算術や測量の知識を得たので、とう〳〵測量師になり、これで僅

躊躇

糊口

に糊口の資を得ることになつた。かくて、或る製圖家の處へ月給二十弗の約束で雇はれたが、當時既に著手して居つた「アルスター」といふ土地へ出掛けようとした時、雇主は一錢の旅費も與へないで、若、旅行中何か必用のものを買ひたいと思はば、自分の名を告げこの手帳を示し、その品物の名と代價とを記して貰ひさへすれば、先方では自分を信用して、必要品は皆足下に貸して呉れようといひながら、一冊の手帳を呉れた。彼は困つたと思つたが、已むを得ないから雇主の家を出で先方へ行つた。

店丁

翌日必要品を買はうと思つて、或る店へ行き、雇主のいつた通り手帳をその家の店丁に示して頼んだ。すると、店丁は貸すは愚か、色を作して、「君は未だ彼の雇主の事を知らないか。先の時分なら、ともかく、彼の失敗は今日までに既に三回に及んで居る、君とて知らないではあるまい、君は知つて居ながら、詐つて我々から利さうといふのだらう」と詰られた。彼は意外に思つて事情を陳べ、他意なきを示したものだから、店丁も氣の毒に思つたか、漸く是を信じて品物の代金を貸した。

失敗

差閊

彼は店丁の情誼で、先づその品物だけは差閊なく手に入つたが、是からの事を考へると、心細いこと限りなく、歩を進めながらも、幾度か低回顧望しつゝ行く内、不圖、一農家の前へ出た。頃は早や午時を過ぎて居たが、朝から一塊の食だ

低回顧望

麵麭

貯藏

も口にしないから、空腹に堪へないので、その農家に立ち寄り、懇に一飯を乞うた。この家には老夫婦が居つて、親切にも「グールド」を案内して、種々、彼の方向などを聞いた末、求めた麵麭を給したばかりでなく、七「シルリング」程の金をさへ惠んで呉れた。「グールド」は是に勇氣を增して、この金を資金とし、その後若干日を經て、所期の測量を終り、この地圖を成就し、其を五百弗に賣渡した。是が手初めで、爾來或は「デラウェア」又は「アルバニー」などといふ土地の地圖を作り、間もなく五千弗といふ金を貯藏する樣になつた。

一二　ジェー、グールド（その二）

水魚の交

機會

この後「グールド」は、續いて四方の測量に從事して居る內、「ブラッド」といふ人と知り合ひ、この人と意氣相投合して、事業の友として水魚の交を結んだ。「知己は幸運の確實なる保證である」といふ語があるが、眞に「グールド」がこの大業をなした所以のものは、一つには自身の奮勵にもよるが、一つにはこの親友が與へた機會にもよるのである。

「ブラッド」は、彼に勸めるに柔皮業を營むことを以てし、そのために本州の西部の方へ赴かした。仍つて「グールド」は西部に行き、本務の傍、その地方を視察して居つたが、この邊には良材となるべき樹林の多いのを發見し、その一大遺利を看過するに忍びないで、頓てこの地に木挽場材木店を開

繼續

恐慌

株券

設し、專ら木材の切出しを業とした。偖彼はこの業を繼續することと數年であつたが、會、紐育の豪商「リューブ」といふ人が讓つて呉れといふに任せ、之に賣却することにした。すると、間もなく、かの一千八百五十八年の商業界に於ける恐慌が來て、金融は爲に閉塞するし、物價は頓に低落するし、「リューブ」の如きも、爲に失敗して竟に自殺する始末になつた。盛運に向ふ時といふものは、不幸が却つて幸福に轉ずるもので、「グールド」は「リューブ」に讓つたお蔭で、この恐慌に際しても別段損毛も受けず、却て當時呼價の殆ど拾分一に低下した鐵道株券を買込み置けば、早晩巨利を占めるに相違なしとの考で、全資力を傾けて、悉くその株券を買ひ占め、遂に

騰貴

破產

一方の鐵道會社長になることを得た。

「グールド」が鐵道事業に關係したのは、これが手初めであつて、切りに事務に勉勵し、徐に市價の回復を待つて居たが、その內幾もなく、かの豫想せる通り、前買占めた株券は、券面の全額と同樣に騰貴したので、忽ち巨利を博し、更に他の鐵道を買入れ、專ら事業を擴張した。爾來種々なる苦心もやるし、樣々なる經營も盡したが、結果は何時も好況を示し、終に世界で有名な共同大平洋鐵道會社の社長として、一度は破產の旦夕に迫つたこの大會社の窮困を救ひ、巨萬の富を作るに至つた。尤も彼がその資產を造つたのは、啻に鐵道事業ばかりではなく、傍ら石炭及び鑛山事業も開くし、農業

投機

卑劣

も營むし、商業にも關係したので、その手の廣いことも、鐵道の縱横に擴がつたと同樣に廣いのである。だから、一面からいふと彼の所業は投機的だなどといふ人もあるが、それは「グールト」を嫉むか、乃至、誣ひたものゝ詞であつて、信ずるに足らない。その證據には、かれが終始一貫してその利益歲入等を、一々公衆の前に告げ、毫も匿すといふ樣な卑劣のない事でもわかる。勿論、彼の事業のあとを見ると、爲すことと遣ることとの、皆その圖に當つたのは、敏捷に勉勵に技倆の限りを奮つたからには相違ないが、よく運命の好期に際會した人といふ評は免れまいと思ふ。

苦情
面倒

豆腐屋

一三　內職

大隈伯申されけるは「我が邦に、何卒、內職を盛ならしめたきものなり。內職とは、一家の子女・老幼が、各、その分に應じて、それぞれの仕事をなすことなり。斯の如くすれば、大にしては、以て一國の富を進むべく、小にしては、以て一家の生活を扶くべし。人おの〳〵その仕事あれば、苦情も面倒も起るまじ。一家の幸福此中より生ぜん」と。記者、實に尤と思へり。

記者の友人に、某會社の取締あり。三十萬圓以上の大會社の取締役なり。その人、申すやう、「余の家は、余が會社より受取る俸給にてくらさず。從前より營み來りし豆腐屋に

負擔
頓著
暮向
家屋敷

て、暮し居るなり。これは、余が細君の仕事として取扱ひつつあるなり。されば、余は、何時、會社を辭しても、又余が身に如何なる變あるも、一家の生活には決して差支なきなり」と。記者、實に感心せり。

今日、一般中等社會に於ては、一家の生活は、全くその主人の負擔にして、その他の家族は少しも頓著なく、一口にて云へば、先づ厄介物の姿なれば、主人が幅を利かし居る中は一家何となく春めきて、日々の暮向より、交際にいたるまで、中々大層なれども、一たび主人の身に變あれば、時ならぬ秋は來り、一家老少、手を束ねて泣き入るの外なく、僅かに、家屋敷を賣り、諸道具を賣り、微かに一家の糊口を繋ぐものあり。

裏店
團扇

中には、身代富裕にして、左樣の心配なき者までも、兎角、一家生活の責は、獨り、主人の肩の上にのみありて、家族は一切關係せぬ事は、上等社會になればなるほど、益、甚しきが如く覺ゆ。されば、上等社會の家族ほど、その權力は、概して薄く、實に錦を著たる乞食とも云ふべく、憐むべき情態なりとす。下等社會は、然らず、裏店の妻君たちは、マッチ箱を張るやら、團扇の骨を削るやら、ハンカチーフの耳を縫ふやら、石版畫の彩色をなすやら、色々の仕事あり。彼等は、必しも、主人の厄介物にあらず。主人仕事より歸れば、夫妻一つ膳に差し向ひ、欣々然として、鮭の鹽引、鰯の煮付、以て一日の樂を全うす。吾人は、人生の幸福、實に此の中にあるを信ず。

勢力

上州・信州は、最も婦人の勢力多き地方なり。何となれば、その婦人は、多く蠶絲業に關して、一人前の仕事をなし居ればなり。此によりて考ふれば、勞作せずして勢力を得るの道は、決してこれあらずと知るべし。

維持

吾人は、一家の生活のみならず、幸福を維持する上よりしても、内職の大切なるを疑はず。何となれば、(一)主人の身に異變あるも、一家安全なるを得べし。

異變

(二)家族をして、各、その職を得、厄介物たらしめざるがゆゑに、その權力に於ても、偏重偏輕の憂なかるべし。

偏重偏輕

(三)人々、各、その仕事をなすが故に、假りにも、驕りがましき事はなかるべし。(四)仕事あれば、不善を思ふひまもなく、喧嘩する隙もなく、苦情も風波もなか

喧嘩

るべし。(五)仕事をなす時には、規則立つこと、順序あること、欺くべからざること、誠實なるべきこと、すべて是等の平民的道德は敎へずして習ひ、學ばずして得ん。故に吾人は、上等社會と、中等社會と、下等社會とに論なく、この内職の風を盛ならしめんことを願ふ。上等社會の如き、慈善の業に、この内職より得たる金錢を拋つ如きは、最も、功德ある業といふべし。

慈善

蠶室

漢の文帝の言葉に「一夫耕さざれば、必ず餓うるものあり、一婦織らざれば、必ず凍ゆるものあり」と。又我が邦の皇后陛下は、御所内に蠶室を築き給ひ、自から蠶兒を育し給ふと承はる。かつ、英國女皇の如きも、世界第一の富を有し給

補綴　偶然　勤儉

ふに拘はらず、皇子皇女の靴足袋は、自らその破れを補綴したまふと承はる。共にこれ欣仰すべき至ならずや。聞く米國にては、その小兒が、自ら鷄を養ひ、その卵を賣りて、以て學資に供すと。吾人は之を聞いて、米國の富强の決して偶然ならざるを見るなり。我が邦の國風も、何卒、斯くありたきものにあらずや。內職は、勤儉の基なり、勤儉は、國家隆盛の基なり。（德富猪一郎）

一四　大阪商業の沿革

大阪は攝津國東成郡・西成郡の二郡に跨り、東西一里三町南北三十四町に亘れる一大市街なり。天正十一年、豐臣秀吉この地に居城を築くや、村落の田畝を開きて、大に市街を起し、先づ堺の富豪をしてこゝに移らしめしより、諸國の商人爭うて集り來り、一時その繁盛を極めたりしが、慶長・元和二役の戰亂のため、市街大に荒廢し、商估四方に離散して、また寂寥たる光景を呈するに至れり。その後、松平忠明の封をこの地に受くるに及びて、鋭意力を市政に盡し、努めて流離の人民を招集せり。また安井道頓をして、東西横堀の間に家屋を建設せしめ、伏見に住居せる二百餘町の市民をそこに移せり。ついで、東横堀より木津河口に至る間の荒蕪の地を、道頓に與へてこれを開かしむ。道頓、即、南横堀を疏通して、その兩側に許多の家屋を建設したり。今の道頓堀

居城　封　安井道頓

革新

問屋

手形

これなり。

元和元年、幕府、忠明を大和の郡山に移し、この地を以てその直轄とし、内藤信正を城代として、畿西の四道・二島を管せしむ。城代の下には、東西の町奉行ありて市政を督せしより、大に革新の實を得たり。また、寛永十一年には、將軍秀忠みづから大阪城に臨みて、親しく市中の商業を視察せり。

寛文中、石丸定次、東町奉行に任ぜられたり。この人頻に心を市政に碎き、商家に問屋を設けて荷物の運轉を迅速ならしめ、營業に成規を立てゝ仲間の信用を厚からしめ、大小の兩替屋を設けて手形の流通を盛ならしむる等、鋭意商業上の利益をはかりしより、遠近の商估、風を望んで移住し來

仲買

返濟

り、商運日を追ひて盛大となりぬ。はじめ寛永二年に、二十萬九千六百十人の人口なりしもの、寛文九年には、增して四十萬七千三百四人の多きに及べり。以てその進歩の一斑を窺ふに足らむ。

かく、商業の進歩するに從ひて、問屋・仲買・小賣の區別、愈、確立し、互にその商域を守りて、他人の營業を害することなく、德義と信用との二つは、大阪商人の特有性となれり。萬治年中、大阪の一商人、その銀子借用狀に

萬一此銀子返濟いたし不申事候はゞ人中において御笑被成候共其節一言可無之候

と、認めたりといへり。この一事にても、いかばかり大阪商

人がその廉恥を重んぜしかを見るべきにあらずや。

漲溢

開鑿

大阪の地は、濕地多く、汚水の漲溢しばしばなるを以て、天正十二年以來、數多の新堀を開鑿して、その疏通をはかりしかど河身なほ常に充塞し、雨水の漲溢甚しかりしかば、元祿元年、河村瑞軒に命じて、九條島の中間を開鑿せしめ、一道の新河を通じて、直に海に通ぜしめたり。長さ一千丈、幅三十餘丈、これを安治川といふ。かくて、漸次郊外の土地を開きて、これを市區に編入し、以て市の區域を廣めしかば、諸國の物産、皆、集注し來り、四方の商估爭ひて移り來りしより、今は尺寸の餘地をもあまさゞるに至れり。

尺寸の地

當時、市區を南組・北組・天滿組に分ち、これを總稱して大阪の三鄕といへり。町數およそ六百五十町、總年寄十四人を置きて、三鄕萬般の事務を支配せしめ、その下に町年寄を置きて、一町内の事務を掌らしめたり。かくて商業は益、進歩し、正德年間を經、文化年中に至りては、全國の物産、皆、こゝに集りて、更に全國に輸送せらるゝ狀況を呈し來りしかば、商估一般にその富裕を極めたり。

年寄

輸送

その後、天保八年二月、饑饉に乘じて、天滿東組與力大鹽平八郎、細民を集めて亂を起し、火を天滿屋敷に放ちしより、火勢延いて百二十餘町に及び、類燒の災に罹るもの實に一萬八千二百五十餘戸の多きを數へ、一時商業の衰頽を來せり。されど、久しからずしてまた舊態に復し、慶應末年の騷亂時

衰頽

代に至るまで、著しき變革を見ずして、常にその繁盛を保ちたり。（横井時冬著「日本商業史」）

一五　北海道の農業

開墾

畦間

開墾の業は、以前は餘程難儀であつたが、次第に簡便な方法を工夫して、容易に成功することが出來るやうになつた。樹林地では、樹を伐り、木材・薪等をとり、殘りは程よく纏めて、之を燒き、笹其外の下草は、晴天の時、燒き拂ひ、又は苅り集めて、燒き拂ひ、扨其後は、種子を蒔くべき個所、又は畦だけを墾し、草取の時、其間を削り起し、翌年は畦間を墾して、全く熟田となすが普通である。又初年から、全部丁寧に墾するもの

勞力

馬鈴薯

耙耮

もある。又草原では、新墾洋犁を以て、馬に墾させるものも少なくはない。開墾に要する勞力は、土性及ひ草木の模樣などによつて異なるが、大抵一反歩につき、草原は四人乃至八人、樹林地は八人乃至十五人位はかかる。草原を洋犁にて墾するときは、二頭で一日五六反歩である。開墾地によく出來る作物は、大豆・小豆・粟・黍・玉蜀黍・蕎麥・菜種・馬鈴薯等で、種蒔の期節が後れると、收穫が減つて難儀をするから、よく注意せねばならぬ。

畑に、樹の根の障害のない樣になれば、洋犁を馬に曳かせて墾し、次に耙耮を馬に曳かせて土を碎き、次に畦を作り、種子を蒔く。又畦立・草取まで、馬と器械とを用ふるものもあ

る。馬を使つて、畑を廣く作るが、本道農業の大なる利益であつて、大抵洋犁は、一日に五反歩、耙耨は一日に二町歩の仕事をすることが出來る。

作付反歩の多いのは、大豆・小豆・麥類（大麥・小麥・裸麥・燕麥）・菜種、次は馬鈴薯・米・黍・蕎麥・粟・亞麻・菜豆・荏・胡麻・牧草・藍・大麻等である。蘭・杞柳なども、よく育つので、追々處々に作られる。

蔬菜

蔬菜では、蘿蔔・牛蒡・漬菜・甘藍・南瓜等、果樹では、苹果・梨・櫻・桃などが多い。水田は、近來最も著しく進歩しつゝある。畑作物は、西洋種が割合に多い。又日本種でも、本道に慣れたものは、結果が宜しいが、凡て同じ種子を作り續けると、段々惡くなるから、なるべく廣く交換して作る樣にせねばならぬ。

團結

餘裕

本道の原野は、團結移民の開くもあれば、各府縣の移民が、入り交つて開くもあり。又、大資本家が小作人を入れて開くもあつて、一樣ではないが、中にも、團結移民は、互に相親み、相助け、共に仕事に勵むから、開墾の當時、便利なるばかりでなく、開けた後も、村柄が宜しくなる。大抵移住した時は、草小屋を作つて住むが、二年三年と、次第に開墾して、耕地を增し、收穫物を賣るやうになると、生計に餘裕を生じて、馬も車も買ひ求め、草小屋を改めて、柾屋を建て、庭に植ゑた果樹も、追々實を結ぶなど、誠に樂しい暮し向きになる。尙、村内には、學校も新築し、商店も出來て、此處に鄕里にも劣らぬ村落が出來るのである。

開拓の業は、一時は苦勞であるが、其結果は、誠に愉快である。（北海道殖民圖解）

一六　森

かたみに上に、　いてんとて、
爭ひたてる、　高き木の、
天つ光を、　身にうけて、
ゑみほこりたる、　下かげに、
惠にもれて、　今もかも、
枯れんとすなる、　小草あり。
繁きさはりに、　さへられて、

人に知られぬ、　梢あり。
あらしの風を、　よそにして、
靜にねぶる、　老木あり。
あだし梢に、　やどり木の、
時得顏にも、　にほふあり。
われとのぼらん、　力なみ、
よそにかかれる、　かづらあり。
しづけき森の、　草木すら、
猶憂き世には、　もれずして。（佐々木信綱）

一七　「クルップ」鐵工場

行幸　參差　鹵薄

西暦一千八百七十七年九月二日、獨逸皇帝「ウィルヘルム」陛下は皇太子「フリードリヒ、カール」殿下を從へさせられ、「モルトケ」將軍以下の高官に供奉せられて、「エッセン」なる「クルップ」鐵工場に行幸あり。　正門は左右に開かれ、新に作られたる「アーチ」は綠葉參差として車駕を迎へまつり、場内千百の烟突は、高く半空に聳えて、煤烟そこに瑞雲を現ずるが如く、數限りなき鐵槌は勇ましき響に音たてゝ、君が萬歲を歌ふに似たり。　車駕やがてちかづきしが、鹵薄の盛なるは工場の偉大なると相對して、壯觀まことにいふばかりなく、工場主の名譽は遠く國外にまで響き渡れり。

嗚呼、此大工場はいかにして成立し、その工場主は、いかに

鑄鐵　辛酸

してかゝる名譽を擔ふに至りたるか。　われらは、そこにその工場主「クルップ」氏が、幾十年の慘憺たる歷史のこもれるものあるを見て、ひとへにその苦心のあとゝ、その成功の偉勳とをおもはざるを得ざるなり。

今の工場主なる「アルフレッド、クルップ」氏の父「フリードリヒ、クルップ」氏は、そのはじめ一の小工場をそこに建設して、鑄鐵の業に從事せしが、それより數十年の間、金力をつくし勞力をつくして、ひたすらにその研究をつとめ、あらゆる辛酸を嘗め盡して、漸くその鑄鐵の一新法を發明することを得たり。　されど、そはたゞ新法の發明せられたりといふのみにて、これが爲に收益の增加したるにはあらず。　生活

は益困難に、心身の勞苦は舊にもまして甚しく、かくて遂に空しく志を齎らしてこの世を去れり。

「アルフレッド」は、この時漸く十四歳に達せしばかりにて、まさに中學校の第三年生なりしなり。不幸なるこの少年は、こゝに學校を退學せざるべからざるに至れり。今や彼は、工場の一職工として、自らその間にたち雜りて、その技術を磨き、以て他日工場主たるべき素養をなさゞるべからざる境遇に立ちぬ。晨に起きて工場に入り、槌聲烈火の間にその身を置き、夜はまた嚴格なる母の膝下にありて、業務上の課程を習ひぬ。かくてこの少年の腦裏には、いかにもしてこの大業を成し遂げて、以て父の志に酬いむとの念深く

素養

課程

負債

刻まれて、寸時もその事を忘れず、いかなる勞苦をも決して辭することなかるべしと誓ひぬ。その折の少年の勞働の、いかに烈しかりしか又その志のいかに堅かりしかは、彼の當時を知るものゝ、常に驚歎して措かざるところなり。されど、幸運はなほ彼の頭上に向ひ來らざりき。損害に損害を重ねて少しの利益もなく、たゞまさりゆくものは負債の額のみなりき。少年の志は、かくても奪ふべからず。誠實に働かば、いかで志の達せられざる時あらむやとの念は、益かたくなりぬ。

精勵の効空しからず、彼は遂に一種の精巧なる鑄鐵を製出せり。かくてそを英國に輸出して、少からぬ利益を得た

展覽會

りければ、そこに直に新工場を起せり。勇ましき鐵槌の音、工場内にみちて、烟突より吐き出す煙はすさまじく、彼は漸くたのしき生活をいとなむことを得たるみならず、伯林の工藝展覽會より、その出品に對して金牌を授與せらるゝ名譽をさへ擔ひたり。

飢渴

されど、再度の不幸は彼の頭上に落ちぬ。そのころ、ひきつづきて起れる國内一般の不景氣は、殊にその影響を商工業者の上に與へ、彼の工場もまたその禍を受けぬ。當時の彼の困難は、まことにいふばかりなく、彼はその家にありし、すべての銀製の器具を賣り拂ひて、僅に職工等の飢渴を防ぎしほどなりき。彼はこれより長く銀製の器具を用ふること

王公を凌ぐ

となく、後年志を得て、富貴王公を凌ぐに至りし後も、決してこれを購入せざりきとぞ。

精巧

彼は一般鑄鐵の外、常に精巧なる大砲を製造せむとして、さまざまに心を碎きしが、遂に一千八百四十七年に至りて、その鑄鐵によりて精巧なる三ポンド砲を製出せり。その大砲は、獨逸國砲兵士官の試驗によりて、良好なる成績を示したり。次で、六ポンド砲も製出せられぬ。又その次年には、千四百八十貫餘の鐵板を、英國の市場に出せり。こゝにおいて世界の工業界は彼を賞揚すること甚しく、「クルップ」の名、忽、世に高くなれり。

かくて、國内はいふも更なり、亞米利加合衆國・英吉利等の

偉功

海外諸國より、その注文續々として「クルップ」工場に集注し來り、鐵道・蒸氣船等の製造業、益、進むにつれて、その業務は日一日と擴張せられぬ。

又その製出したる大砲は、わが本國の軍隊に採用せられて、普墺戰爭および普佛戰爭にその偉功をあらはしゝかば、各國皆爭うてこれを注文し來り、その製造高は年を追うて非常なる額に上れり。かくてその工場は、益、增築せられ、製造の用具もまた幾多の改良進歩を經て、今は蒸氣機關によりて活動する鐵槌を以て、よく二萬六千貫餘の大鐵板をも製出するに至れり。

嗚呼、山間の一工場は、かくの如くにして今や世界の一大

架設
消費

工場となりぬ。その全工場の範圍の大なる、實にこれを一大都府に比すべく、電信・電話の線は縱横に架設せられ、場内煙突の數は三千五百四十二の多きを數へ、日々に消費せらるゝ石炭の量二千四百十噸に上り、職工の數二萬五千二百人、その家族六萬二千人の多數に及べりといふ。かくてこの八萬七千の人は、皆この一工場主「クルップ」の力によりて生活しつゝありといふに至りては、まことに驚歎すべき事實ならずや。

一八　日本海の大海戰

五月二十七日以來、繼續中なる日本海戰に關する聯合艦

報告

隊司令長官東郷平八郎の報告左の如し。

其一。（五月二十七日午前著電）

敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直ちに出動、之を撃滅せんとす。本日、天候晴朗なれども、波高し。

其の二。（五月二十七日著電）

邀撃

聯合艦隊は、本日、沖の島附近に於て、敵艦隊を邀撃し、大に之を破り、敵艦少くも、四隻を撃沈し、その他には、多大の損害を與へたり。我が艦隊には損害なし。驅逐隊・水雷艇隊は、日没より襲撃を決行せり。

其の三。（五月二十九日午前著電）

聯合艦隊の主力は、二十七日以來、殘敵に對して追撃を續行し、二十八日、リヤンコールド岩附近に於て、敵艦ニコライ第一世（戰艦）・アリヨール（戰艦）・ゼニヤーウイン（裝甲海防艦）・アブラキシン（同上）、及イヅムルード（巡洋艦）より成る一群に會して、之を攻撃せしに、イヅムルードは、分離して逃走せしが、他の四隻は、須臾にして降伏せり。我が艦隊には、損害なし。

損害

捕虜

捕虜の言に依れば、二十七日の戰鬪に於て、沈沒したる敵艦はボロジノ（戰艦）・アレキサンダー第三世（戰艦）・ゼムチユーグ（巡洋艦）、外三隻なりといふ。

捕虜、海軍少將ネボカドフ以下約二千（備考略す）

其四。（五月三十日著電）

五月二十七日午後より、翌二十八日に亙り、沖の島附近よ

り鬱陵島附近までの海戰を、「日本海の海戰」と呼稱す。

其五。（五月三十日著電）

聯合艦隊の大部分は、前に電報したる如く、一昨二十八日午後、リヤンコールド岩附近に於て、敗殘敵艦隊の主力を包圍攻擊して、其降伏を受け、追擊を中止し、之が處分に從事中、午後三時頃、更に南西方面に、敵艦アドミラルウシヤーコフの北走するを發見し、磐手・八雲は、直ちに、之を追擊し、先づ降伏を勸告せしも、敵、之に應ぜざりし故、午後六時、已むを得ず、之を擊沈し、その生存者三百餘名を救助收容せり。

追擊

又、午後五時、北西に、敵艦ヅミトリドンスコイを發見し、第四戰隊及び第二驅逐隊、之に追及し、日沒後に至るまで、猛烈に砲擊せしも、擊沈するに至らず、夜に入り、第二驅逐隊も、之を襲擊し、その結果不明なりしが、昨朝に至り、第二驅逐隊はヅミトリドンスコイの、鬱陵島の東南岸に擱座せるを發見し、目下春日と共にその處分中なり。

猛烈

擱座

又漣は、一昨二十八日夕刻、鬱陵島の南方に於て、敵の驅逐艦ビエドーウイを捕獲せり。同艦には、二十七日の戰鬪中沈沒したる敵の旗艦クニヤージスワロフより、敵艦隊司令長官ロゼストウインスキー中將幕僚以下八十餘名、移乘し居りしを、悉く之を捕虜にせり。右、將官は、重傷なり。

捕獲

又、千歲は、一昨二十八日朝、北航の途上、敵の驅逐艦一隻を發見して、擊沈し、新高及叢雲は、同日正午頃、竹邊灣附近に於

て敵の驅逐艦一隻を擊破して、擱岸せしめたるの報告に接せり。（中略）我が艦隊諸艦艇の損害に就きては、未だ詳細の報告に接せざるも、本職の視界内に在りしものには、一も、大破したるものなく、孰れも、尙作戰任務に從事しつゝあり。

調査

死傷も、未だ調査に暇なきも、第一戰隊に於て、將校以下四百餘名あり。

負傷

依仁親王殿下は、御無事にあらせられ、三須司令官は二十七日の海戰に負傷せり。（其六以下之を略す）

（東郷平八郎）

一九　日本海々戰の歌

一、對島の沖の朝霧がくれ、
見そめ得たりや敵の軍艦。
縱列つくる三十八隻、
風は堂々あたりをはらふ。

二、日本海と名にさへ負へる、
我ふところの波おし分けて、
大手ふり〳〵臆せず行くか。
かれ提督よ、あっぱれ勇士。

三、かくとはかねて、物見の艦の
偵察つゆの遺漏もあらず。
無線の電信主力の方へ、

響けば忽ち戰鬪準備。

四、あがるや信號、皇國の興廢
是此一擧を努めよ各員。
將卒ともに肉こそ躍れ、
艦内更に一語をきかず、

五、見よ見よ敵は壓迫せらる、
西北よりも眞南よりも。
わが計畫の包圍は成りて、
敵の狼狽手に取る如し。

六、萬歲、萬歲、戰艦やけつ、
愉快、愉快、旗艦も沈む。

萬歲・愉快の叫びの中に、
東鄕大將、眉こそあがれ。

七、浦鹽さして遁れんとすれば、
忽ち我にせきとゞめらる。
もと來し方へ返せば我は、
彼より早く待伏したり。

八、まして夜襲水雷諸艇、
探燈・砲火、事とも爲さず、
突擊・猛進、暫もやまず。
敵艦今はあらしの木の葉。

九、あくれば二十有八日の、

波も綠の竹島あたり、
筒に玉せず手に入れたるは、
少將こめて大艦四隻。
十、
かれ提督も終にはとりこ、
昨日の威風は今日の幻。
わが海軍のいさをの高さ、
誰か忘れん萬代までも。

（阪正臣）

隱遁

二〇　人間社會自ら義務あり

深山幽谷に隱遁して、所謂仙人とならば格別、苟も同類、

傳染病傳播

雜居

群を爲して浮世の衣食住を共にせんには、我一身一家を維持し、兼ねて、同類に對するの義務を免るべからず。われはこれ獨立の身なり。一毫も人に取らず、一絲も人に與へずと云はゞ、同類に緣なき如きも、他人の著したる書を讀み、又他人の發明したる器械を用ひて、大に便利を得れば、則、その著者・發明者の餘澤に浴するものなり。自家の失火に近隣を燒き、家人の傳染病毒を世人に傳播するが如きは、害意こそなけれ、事の跡を觀れば、他人の財を奪ひ他人を殺すに異ならず。これらの例を列擧すれば、實に際限なかるべし。されば、人間は同類に對して、斯くまでに關係深きものなれば、我身の果して仙人ならずして、社會雜居の一人なること

博奕

繁昌

を知らば、體力を強壯にして精神を活潑にし、以て先づ一身一家の生計を營み、身を粉にしても、直接に他人の厄介たることなきを謀り、孜々勉勵し、常に其見る所を廣くして、社會公益に注意し、等しく事業を營むにも、間接に世を利するものを擇ぶこそ本意なれ。博奕に勝ちたる錢は、酒を飲むに足るべしと雖、その錢は他を損して生じたるものなり。慈善家に惠まれたる金、以て家の生計を助くべしと雖、その金は他を利して得たるものにあらず。文明の人の快とせざるところなり。此道理を擴むれば、資本家と起業者と相待ちて互に其利益を受くるは可なれども、單なる高利貸の世に賤まるゝは、偶然に非ず。文明の商工次第に繁昌すれば、物を賣る者も、買ふ者も、人を役する者も役せらるゝ者も、共に利して共に社會の快樂を多くし、直接に恩を施す者なきが如きも、間接に相助くるものと謂ふべし。これ、即、文明の世に處する道なるべし。（福澤諭吉）

起草

二一　「ボアソナード」を送る詞

余は一日、朝早く「ボアソナード」君を永田町の家に訪ひたりしに、君は例の如く文机に倚りて、餘念なく法條を起草し居られたるが、その顏色衰へて、常ならずおぼえければ、「病やある」と問ひしに、「病はかくこそ」とて、その足を示されたり。見れば、二つの脚共に水色になりて、腫れふとりたり。余は

義務

秘書官

「なにゆゑに靜に養生し給はざるか」と問へば、「司法大臣と約ありて某の日までに若干の個條を起草し畢へざるべからず。この義務は病によりて背くこと能はず」と、答へられたり。余、かつは驚き、かつは覺束なく思ひて、いそぎ山田司法大臣の邸にいたり、その由を告げけるに、司法大臣もともに驚かれ、即、秘書官をして君を訪問せしめ、速に轉地療養あらむことを勸められけり。君は約束當時者の命を受けて、はじめて、心おきなく田舍に轉養せられたり、余はこの時家にかへり、ひそかに嘆息していへらく、「凡、つかさある人々にして、かくまでに深き義務心に伴へる勉强を以ていそしみたらむには、立法事業幷に諸般の事の擧らざることやあるべ

價値

遺憾

き」と。このこと一小件なれども、余は將來「ボアソナード」君の名譽ある史傳中の一段とすべき價値ありと信ずるが爲に、別に臨みてこれを公衆の前に述ぶ。君の二十年間の立法上の功績のごときは、他の諸君の演述に讓りてこゝにいはず。余は實に「ボアソナード」君と二十年來の友なり。場合によりては、わが師なり。さるを、病のために餞の席に臨むこと能はざるは、遺憾のきはみなり。今、書して君の旅行の安全を祝し、併せて、左の詞を以て君を餞す。

『余は君が我が國を呼びて、「第二の本國」といへりしことを記憶す。余輩は將來に遠く君を海のあなたに慕ひ望むと同時に、君もまた長く第二の本國を忘れざることを知る。

「ポアソナード」君よ、君の第二の本國が、立法上、及諸般の事實において、いかに發達するかを見て、幸に余輩のために必要なる注意と勸告とを怠ることなかれ。』（井上毅著「梧陰存稿」）

清潔濃密

二二　海濱の氣候

海濱は、寒暖ともに酷烈ならず、晝夜溫度の變化も亦著しからず、これ、その氣候が、他の陸上に比し、衞生に適する所以なり。又、その空氣は、常に清潔濃密にして、汚物の混在すること少く、かつ、和風は徐に衣袂を吹いて、無盡の海風を送るなどは、海濱氣候の特徵なり。

海氣には「オゾーン」と稱する成分を含む。この「オゾーン」は、酸化力強く、かつ、清淨作用大なるを以て、その人身に及ぼす効能亦頗る多し。或は皮膚、及、粘膜を刺戟して、これを強壯ならしむるが如き、或は酸化作用を大ならしめて、組織の新陳代謝を促すが如きは、その著しき例なり。而して、その結果は、血の循環を善くし、食慾を進め、動作を活潑ならしめ、從つて、精神に爽快を覺えしむるものにして、數へ來れば、衞生上の効果實に少からざるなり。

刺戟　活潑

且、夫れ、波打つ汀にたゝずみて、旭日蒼波を破るの景を眺め、夕陽西海に沈むの色に接する時は、氣宇自ら開くる思あり。細波の寄するところ、島影倒にくだけ、白帆の過ぐるところ、鳧鷗前後に戲るゝ光景など、誰かその心を樂ましめざ

影響

動搖

無量

るものあらんや。海濱の心身に與ふる影響、それ亦大なるかな。

海濱の氣候風色が、人の心身に影響すること此の如し。更に海水に浴する効果を擧ぐれば、その動搖は、身體自然の運動となりて、胸膈の活動を補助し、また、その中に含有する成分は、或疾病に効驗ある等、これ皆海の寄與する衛生上の賜なり。

されば、歐米諸國に於ては、夙に、この天與の賜を空うせずして、無量の海氣・海水を利用し、衛生上の良果を收むるもの少からず。本邦に於ても、亦漸く海水の効果を認めて、各處に海水浴場を設け、夏季に至りて遊浴するものあるは、喜ばしき現象といふべし。自今、衛生思想の普及と共に、洽くこれを利用するに至らば、國民の健康に裨益すること、蓋、尠少ならざるべし。（關以雄著、衛生讀本）

二三　旅行の心得

旅行して口惜しくおもはるゝは、わが財を有せることの少きよりも、わが學を積めることのいまだ少きことなり。歷史にくはしく通じ居らむには、わづかに遺れる古の河の流・城の墟、さては破れたる寺・頽れたる塚などに臨みても、限なき感をおこし、人知らぬ興をおぼえて、身にしみ心に留ることも多かるべきを、何事のありし處とも知らで、わが學の

墟

趣味

疎きまゝに、何の趣味をも覺えで、たゞ空しくそこそこに通り過ぎなむは、まことに口惜しきことの一つならずや。

通塞

地理をよく知らむには、路の通塞をも難易をも胸に曉るものから、日暮になほ宿るべき所を得で、迷ひありくなどいふ、愚かなる目にも會はず、たゞわづかの迂路をせざるがために惜しき名勝を見殘すことも無く、よろづにつけて心たしかに便多かるべきを、地理に暗きため、あらぬ心づかひをなし、良からぬものに欺かるゝなど、これまた口惜しき一つならずや。

迂路

等閑花禽

草木禽獸につきての智識乏しきものから、すべての物を等閑にのみ見て過すほどに、異なる鄕の珍しき花禽を眼にしながら、たゞ紅き花咲き居たり、白き禽翔り居たりとばかりおぼえて、なにひとつ明に識るといふこと無く、後に人に問はるゝことなどあらむ折、「知らず、知らず」とのみ答へむは、これまた口惜しきことならずや。

農工の事につけても、繪畫彫刻の道につけても、すべてわが學淺ければわが趣味乏しきまゝ、わが興も薄く、千里の路を行きてたゞ疲勞のみをおぼえむことの、さてもさても口惜しき限ならずや。

疲勞

無學にして旅行するは、たとへば夜行くが如く、すべての美しきものをも認めずして過ぎゆくなり。こはげに平生より心がけ置くべきことなり。（幸田露伴）

三更

髣髴

二四　元旦の松島（その一）

枕上の燈穗豆の如く、三更いつしか過ぎて、四更にもなりぬ。一日歩行の疲勞は、ともかくも睫を塞がらしめつ。かくて漸く夢に入らむとせし程もあらせず、山下孤村の鷄聲喔々として、髣髴の間に聞えければ、衾を蹶つて起ち、戸隙より窺ひ見れば、曉の風寒く山頂より吹き下し、夜色なほたゆたふ如く、萬星未だ芒を斂めず。時やゝ早しと見えたりければ、再び被を擁して溫を取ること多時。やがて一綫の微光、戸隙より洩れ、障子の影やゝ白く見えそむるに、忙しく衣を着け、例の紫雲閣に立ちて望む。

地平線

曉鴉

歷階

そのはじめ、きはなく見えし昏黑の夜色、漸く薄からむとして、一道の紫氣、東方の地平線底より騰り來れば、やがて半空に搖曳し、いつしか微紅を染め出しつ。これについて炬火の如きもの一團、雲氣濃薄相混ずるところを透過して、昇降しばらくも歇まず。その色、漸くにして殷なるが如し。忽にして曉鴉の聲あり。啼いて山麓に向ふ。はじめなるは已に林麓に落ち、三四にして漸くその形を見るべし。一片の喧氣展びて雲幔となり、中よりその色を染め、層ごとに色を異にし、合せ見れば一條の寶帶の如く、しかも下より下に及び、漸次に彩色の鮮麗を增し、東天すべて笑ふに似たり。しばらくして、圓環の大さ車輪の如きもの、彩雲の層を歷階

凝視

激灑

烟霞雲靄

雋傑

して上り、はじめや緩、おはりや急、すでにその半に及べば、爛爛として熔銅の如く、紫金の線その外圍より迸射し、光芒陸離、人目を眩して、久しく凝視すべからず。漸くにして昇り盡すや、萬道の金箭、紛飛して八表の間に滿ち、餘霞水に映じて漣波を彩り、激灑一色、さながら錦繡を敷くに似たり。天地すでに清明、宿雲盡く披いて、江山、忽、眼前にあり。亂松薺の如きの、八百八嶼、點々錯落、明に碁勢をなせるを見るべし。そもわが日東の地、淑氣神靈の鍾るところ、この一氣粹然、萬古凝りて散ぜず。天には烟霞・雲靄の麗をなし、地には山川・湖海の美をなし、人には雋傑・文章の秀をなす。今や天の時はこれを元旦に得、地の利はこれを松島に得たり。宇宙の

淵然

厨裏

詫言

大觀かくの如きに至りては、わが胸宇いかで淵然海の如くならざらむ。ひとり憾むらくは、この景を描いて深く相副ふこと能はざるを。

厨裏の方には、餅搗く音あたりに響いて聞えしも、こなたには備へもせず。元日の朝を屠蘇も酌まず、冷飯の茶漬、又してもなさけなくおぼえつ。將に發せむとして、甲掛の足袋を求めけるに、あまりの泥に汚れしを洗ひ、火に乾さむとせし折、過せしよしにて、片足は大方ならず燒き失はれしを、詫言一ついはねば、いさゝかむつとせし氣味なき能はず。志ばかりの二人の泊賃、紙に包みて投げ與へしまゝ、跡見かへりもせず、足早に門を出で、山を下り、一里にして松島の村

微醺

にいたる。元日に餅食はぬは不吉の極なりなど、友のいひ出でしまゝに、村端なる一茅店に憩ひて、腥き鮭の卵のうち交りし雑煮餅數椀を平げ、數合の薄酒に微醺を買ひ、又もや程をつゞけ、赤沼を經て山路にさしかゝり、亭午やゝ過ぎし頃、鹽竈につきぬ。友は汽車にて仙臺に還らむといひければ、こゝに手を分ち、ひとり歩を早めて菖蒲田の方に向ひぬ。

二五　元旦の松島（その二）

日影いつしか薄く、空の色、心もとなきまでにかき曇り、北風寒く骨にしみておぼえけるに、やがて雪紛紛として降りしきりぬ。袖うち拂ふ影もなき佐野の渡の夕暮も、かくやとばかり、身はいつしか鶴氅を著たる姿となりぬ。こゝにさらに醉餘の勇を買ひ、滿地の積玉を蹴立てゝ、黄昏のほどに大東館につきぬ。浴後一醉の後、夜の靜なるにつけ、濤聲いよいよ高く、ただこゝもとに寄せくるこゝちして、孤寂の情に堪へねば、又酒を呼びつ。よろづ備れる調度、前夜に比すれば雲泥の差あるを、第一にうれしと思ひぬ。

黄昏

あくる朝、まだ臥戸を出でざるに、障子の玻璃を隔てゝ、青海原の波間より登る朝日の、珊瑚色なるを見る。昨日とはうつて變りし景色、又一しほなり。支度ととのへ、磯づたひ、たどりゆくに、雪は朝のほどまで降りつゞきしとおぼしく、銀屑、地に積むこと五寸あまり、常は藻鹽草ひきちらしたる

珊瑚

藻鹽草

沙汀も、今日はさながら玉を敷きつらねたるが如く、景色えもいはれず。行いて御殿崎に上れば、更に一段の佳眺を恣にするを得たりき。

遊覽

こゝは、鹽竈以南の濱どもの中、ことにすぐれしところにして、三町ばかり海中に、ほどよく突き出でたる岩山の姿、世のつねならず。御殿崎の名は、むかし、太守が遊覽の地に定められしが故に起りけるとぞ。岬端に立ちて眺めやれば、脚下の水際にさし出でたる大岩に、一株の臥松似つかはしく生ひ、南は空もひとつに、波路の末は烟るが如く、やゝ東に向ひて、金華山、寶珠の形したるが霞のひまより見えぬ。西には近く鴻の岬といふがあり。屹然として屏風を立てた

屏風

荒磯

る如く、中ほどあたりに洞穴あり。これを透して遙に望めば、蒲生の松原、立木黑う、三里の長さに及び、その先なる荒磯は、遠く相馬の岬まで續けり。來し方の陸路、磯つゞきの濱邊に波の打ちよするは、白布曳きたるが如く、にほふ日影、海の面にさし映りて、黃金・白銀を浮べたるさまなるが、烟れる松の葉ごしに見ゆるも眩く、菖蒲田の漁家は山に倚り、海に沿ひ、高低參差さながら雪に包れたるは、げに瑤闕玉樓とも見ゆるばかり。

瑤闕玉樓

あまりのおもしろさに、しばしわれを忘れ、天空海濶の裏、この身すでに仙せるかと疑ふ程なりしが、波の音のいともきびしく響きしに驚されて、やがて現にかへりぬ。

天空海濶

こゝ、岬上、雪ことに深くして、まだ全く鞋痕を印せざ

れば、今朝この眺せしものわれのみとおもふに、何となく心あがりせられて、しばしは去りもやらざりき。（久保天隨）

豫備

點檢

二六　北京籠城

六月初旬、わが義勇隊組織の議ありし時、西公使より、軍艦笠置に、水兵入京の際、小銃若干を豫備として持ち來ることを訓令せられたれども、兎も角相當武器の用意なかるべからずとて、六月十日、義勇隊組織成りし日、第一着手として武器を點檢することゝなり、獵銃・拳銃・刀・短劍など、有るに任せて持ち寄りしかど、猶著しく不足なりき。因て補充の策を講じたれど、軍銃を得る途は無論無く、獵銃の類だに急にこれを得べくもあらねば、已むなく支那流の槍を作ることゝなり、俄に鍛冶工を雇ひて、十四五本の槍を作らしめ、辛くして各人一個づつ武器を手にするを得るに至りぬ。然れども、今日の世界に槍を擔ひ、刀を佩びなどせる有樣は、西洋人の眼には如何に異樣に映ずるならむ。殆ど義和團と相距ること遠からずと思ひ、いと心苦しかりき。されば、より、己が姿は見えぬものから、他人の樣を見て、「君は義和團の徒か」など、戲れたること屢なりき。義勇隊長たりし安藤大尉の如きは、義勇隊といふべきを、屢誤りて、義和團諸君といひしも、時にとりて一興なりき。

鍛冶工

護衛

かくの如き次第故、初めわが公使館護衛の任に當り、正門

歩哨

扮装

歩哨に立つ時などは、刀を横たへ、槍を手にしては、西洋人の見る眼も如何なりとのことより、三四挺の獵銃を輪番に持ちて勤務に服したり。　愈、支那官兵との戰、開始せらるゝに及びて、敵は義和團とは違ひ、皆、軍銃をもてることゆゑ、刀槍を以てこれに當ること、如何にも難儀なりしが、如何とも爲む方無く、やはり義和團的の扮装にて戰に臨みたり。　その後、追々我々の手にて敵銃を奪ひ、又法國などにて奪ひしものを借り、或は英米より、その水兵の死したる爲め不用になりし銃を借りなどして、終に七月初旬に及びては、義勇隊一同、皆、軍銃を肩にすることを得、始めて人並の姿となりて、肩身の廣き心地したり。

防禦

掩護

籠城に先だち、防禦計畫を議したる際、柴中佐の意見により計畫定まりしより、當日の議長たりし英國公使は、痛く柴中佐を德とし、從來よりも一層好意を表することゝなりき。さて籠城となりて、我兵、肅親王府を守ることゝなりしところ、該地は直接に英國公使館を掩護する地位にあり、且、全體の防禦上、最、要衝の地位にありしかば、英國公使は深くその安危を氣遣ひ、屢、自ら來りて、わが防禦の實況を視察し、又殆ど日毎に「カピテン、ストラウツ」、若しくは「ドクトル、モリソン」を派してこれを視察せしめ、敵の攻擊激烈にして、我兵員の死傷多きを見ては、伊國・法國・墺國の兵を派し、又、自國の兵若干を派して、わが援助となす等、頗る好意を表し、同時に我兵

攻撃　陷落　叱咤

の死を以て王府を守るに對し、深く感謝と敬意とを表しぬ。

六月末より七月の初に渉り、王府は最も激しき攻撃を受け、我水兵・義勇兵の死傷いと多かりしが、われ〳〵は、一旦この地を棄てゝ退く時は、日本・法國等の公使館は直にその後面の掩護を失ひ、一日も支ふべきにあらず。又敵が王府の兵上に據り、英國公使館を攻撃するときは、同館も數日を出でずして陷るべし。されば われ〳〵がこの地を退く日は、即、外國公使館全體陷落の日と覺悟せざるべからず。一旦の命を生き延びむがために、此處を退かむよりは、潔く此處にて戰死するこそ男子の面目なれ」と、一同決心して、眞に死を以て守り、伊國兵が二度も退却せんとしたるを、柴中佐叱咤して、これを原地に留らしめしことさへありき。

感動　指揮

かくして終に守を全くしたりしかば、援軍來着後、聯合軍將官會議の席上、英國公使は、今回各公使館の幸に安全にして、幾百の婦人・小兒の生命を全くすることを得しは、偏に日本陸戰隊及び義勇隊の力によりたりといふことを、詳細に說明したれば、各將官大に感動し、日本の將官に對し、殊に柴中佐に對して、厚く感謝の意を表したりといふ。然れば柴中佐は、籠城中の指揮官の資格を以て、われ〳〵に對し、厚く籠城中の勞を犒はれたり（服部宇之吉著、北京籠城日記）

二七　瀨戸内海

蜿蜒　侵蝕　花崗岩

淡路の島より馬關に至るまでの間、內海、波靜にして一面の青疊を敷きたるが如く、大小の島嶼、その間に點綴して、風光畫けるが如し。世に瀨戸內海といふはこれなり。

その形、東西に長く、南北に短く、長さおよそ百二十里、幅一里半より十五里に及べり。北には、中國の山系蜿蜒として山陰・山陽、兩道の界に走り、南には、四國の山系連亘して四國の中央を劃せり。これは、そのむかし今の中國・四國は陸地によりて相聯絡せしものなりしを、海水の侵蝕・地下の變遷によりて、いつか相分離して、中間の陸地は全く海中に陷落し、かくてこゝに瀨戸內なる多島海を化成するに至りしなりといへり。しかして、その島嶼及び沿岸の岩石は、多く花

隱見　楓

崗岩より成れり。

春霞淡路の島山をこむる頃となれば、一望の島山あはく空中に消え、島裡の麥浪は、青々として海涙と相接し、農家・漁屋、その間に隱見して、その風景まことにいふべからず。やがて東南風の季節となれば、風は四國中央の山系にさゝへられて、その餘波のみかすかに來り、海面はゆるく細紋を生じて、夜は、又、氷の如き月輪のその間に躍り出づるなど、月色の大觀こゝならで、はた、いづこにかもとめむ。漸くにして、秋氣、長空に連り、風霜、島山の花崗岩骨を侵せば、楓樹は錦を溪谷に織り出して、島際の風煙まことに染むるに似たり。ことに、小豆島、寒霞溪の紅葉を以て、まされりとす。秋もい

風趣

つしか過ぎて嚴冬の節となれば、降雪の白色は花崗岩の白色と相映じて、ますますその光を添へ、風趣更に一段の美を加ふ。春夏秋冬その風光の極らざること、かくの如し。しかして、一たび舟をこの間にやらむか、海は島嶼に圍繞せられて、波浪の靜なること恰も鏡面の如く、路は忽ち極るが如くにして忽ちまた開き、島轉じ海めぐりて、またそのつくるところを知らざらむとす。宜なり、歐米人のこれを激賞して世界の絶勝と呼ぶや。（志賀重昂著「日本風景論」）

二八　皇室の御聖德

ことさらに申上ぐるも畏れ多きことなれど、わが皇上の

御聖德

萬機公論
經綸

陋習
皇基

御聖德は、これを記し奉りて、數百頁の册子を重ぬるとよくつくすべきにあらず。さきに明治元年三月十四日、南殿に出でさせられ、あまねく公卿・諸侯を召し、みづから神祇に誓はせたまひて、

一、廣く會議を起し萬機公論に決すべし。

二、上下心を一にして盛に經綸を行ふべし。

三、官民一途庶民に至るまで各々其志を遂げ、人心をして倦まざらしむること要す。

四、舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし。

五、智識を世界に求め大に皇基を振起すべし。

といふ五箇條の御誓文を定め給ひしより以來、常にこの御

憲法　執掌　徹宵

趣意に基かせ給ひ、これによりて百般の法令を發布せられ、憲法の大典を定めさせられ、したしく身を軍籍に列ねさせたまふ等、專ら國事に執掌し國民を愛撫せさせたまふこと、須臾も變らざるは、實に萬民の感喜し奉るところなり。

嘗て皇居の御守衛に列せし一兵卒の、靴を召させ給ひ、手づから御覽じて、その勞苦を慰めたまひしが如き、或は彼の日清戰役の際、大本營を廣島に移させ給ひ、在營の諸員と共に、徹宵、事務を攬らせ給ひしが如きは、その聖德の一二に過ぎずと雖、如何に陛下が仁惠の大御心に富ませ給ふかを、推知し奉つるに足らむ。

又、皇后陛下が女官を助けて、親しく養蠶の事に盡し給ひしが如き、或は慈惠病院を見舞はれて、貧民の病狀を訪はせ給ひしが如き、天皇陛下と心を一にし給ひて、下、萬民の勞苦を思ひ遣り、仁德をつませ給ふこと、たゞ〳〵感泣するの外なかるべし。

優渥

我等、明治の聖代に生れ、此優渥なる皇恩に浴す。何を以てか是に酬ゆるを得ん。唯聖上の御宸襟を安んじ奉り、御叡慮を悅ばせ奉らんが爲め、各自の德行を磨き、各自の職業を勵み、撓まず屈せず、公益を廣め、國益を謀り、孜々として國光を輝かすにあるのみ。

左に奉戴し奉るは、天皇陛下の御製と、皇后陛下の御歌となり。

綾錦

いにしへの書みるたびにおもふかな
おのが治むる國はいかにと
綾錦（アヤニシキ）とりかさねても思ふかな
さむさ蔽（ヲホ）はむ袖（ソデ）もなき身を
共に大御心を詠（ヨ）み出し給へるもの、よく〳〵心に銘（メイ）じて記憶し奉るべし。

明治實業讀本　卷の二　終

明治四十二年二月十九日印刷
明治四十二年二月廿二日發行
明治四十二年十月廿五日再版發行

著者　中村康之助
發行者　泉屋清次郎
印刷者　森山章之丞　東京市神田區表神保町二番地
印刷所　綾部喜久二　東京市神田區雉子町卅四番地
宮本印刷所　東京市神田區雉子町卅四番地

明治實業讀本全八冊
定價　金貳拾五錢

發兌　東京市神田區表神保町二番地
電話本局四三七一　振替貯金口座東京一三五五九
同文館

大賣捌　東京神田　東京堂　東京牛込　同文館支店
大阪東區　寶文館　韓國京城　日韓書房

広島大学図書
2000054288